

A photograph of a traditional Japanese garden. The foreground is dominated by a wide, light-colored gravel path that curves from the bottom left towards the center. To the left of the path, there is a dark, rectangular stone structure, possibly a water feature or a small shrine. In the background, several large, grey, layered rocks are scattered across a lush green mossy area. A small stream or pond is visible in the upper left corner, surrounded by dense green foliage and trees. The overall scene is peaceful and well-maintained.

虚ろ花

caramelcaramel

序

記憶は儂い。季節ごと咲いては散る花よりも、脆い。過ぎ行く月日の中で、私の頭の中で、都合よく変換され或いは消去されて、最早おぼろげにしか分からない。あの頃の私はさらにおぼつかない生き物に成り果てていて、この目で見、触れたはずのものでさえなにか薄絹の霞みの向こうで起こったことのような気がするのだ。

けれども。

私は自分の左手をそっと見やる。白い細い手首に、ぐるりと回された美しい五色の紐を思い出す。朧な存在であった私を繋ぎとめたあの静かな執着を、まだ私の肌は覚えている。

闇の匂い

気がつけば、其処は闇であった。高熱を出した後のように身体は重く、記憶が霞んでいる。此処は何処だ。身じろぎに揺れた空気がどこからか、香の匂いを運んできた。線香の匂い、それともこれは塗香の匂いか。知った匂いに少し気持ちが治まる。大丈夫、怖くない、ただ暗いだけだ。思い切って身を起こせば、指先に触れる床は冷たく、滑らかな板張りのようであった。埃ひとつ感じられず、丹念に拭き清められたような感触である。大丈夫、此処は怖くない。もう一度自分に言い聞かせるように頷いてから、そっと顔を上げた。何も見えない。目を閉じてみる。緩やかに動く暗闇の気配。遠くで、何か揺らぐような気配がする。思わず目を擦ろうと挙げた左手が、くい、と引っ張られた。何かに繋がれているようだ。右手で触れれば、手首に何か紐が巻かれているのが分かった。紐の先は闇の向こうに伸びている。どうしよう、この紐を辿ってみようか。紐に縋るように、そっと膝立ちになる。それから、思い切って立ち上がってみる。屋内であろうが、まだ天井は感じられない。紐を手繰り、一步にじり寄るように進む。ひいやりとした板の感触。もう一步。もう少し。途端、背後の闇が揺れたような気がした。慌てて後ろを振り向く。ほのかな明かりの気配がした。間違いなく、小さな灯火が見えるような気がする。目を閉じて、もう一度しっかりと目を見開く。やはり見える、白い輝きが。なんだか立ってられないような気持ちになり、ぱたりと膝を着いた。膝の骨が床を打つ音が、静かな闇に響く。すると、白い灯は此方に気づいたかのように近づきはじめた。次第に輪郭を増す輝き。静かな、躊躇わぬ足音。揺らぐ空気。そして強くなる、香の匂い。

灯明をコトりと床に置いて、男は膝を着いた。此方を見下ろす、ひそめた眉の間に影ができている。僧形の男。なにか言い訳をしなければいけないような気持ちになったが、何と言ったらいいのか分からず、困って男の顔を見た。

男は目を伏せて手を伸ばし、乱れた私の着物の裾を直してくれる。それから、私の足のつま先をそっと握った。大きな、温かい男の手。

「冷えてしまいましたね」

男の手が腰に伸びる。簡単に引き寄せられ、拒む間もなく男の腕の中に納まった。抱き締められるのは、初めてのような気がする。それとも、私が忘れていただけか。肌に馴染む温もり、くすぐったいような香の匂い、首筋にかかる吐息も、どこか知っている記憶のような気がする。よくわからない。

「何処へも行かないで下さい」

「此処に居て下さい」

「どうか」

低く呟きながら、男は私を抱きしめる。懇願する声はまるで読経のようだ。心地よい温もりの中で、けれど頷いてはいけないことだけは分かっていた。それだけはいけない。うっとりするような闇の中、私はゆるく首を振りながら、男の腕の中で眠っていた。

男は訪れては私を腕の中に閉じ込め、何処へも行くなと幾度も囁いて帰っていった。行ってしまふのは男のほうなのに、と私は思う。繋がれている私は何処へも行けない。私の左手首に結わえられた紐は丁寧に縫り合わされた絹糸で、灯明の下で見れば五色の美しいものであった。紐の先は長く長く伸びて、部屋の奥の格子の向こうまで繋がっていた。あの先は、御本尊の観音菩薩の御手に繋がっているという。

「これはね」

私の手首をなぞりながら、男が教えてくれた。

「女の髪を芯に入れて縫り合わせた、とても丈夫なものなのです。虎をも繋ぐことができると言われてます。観音さまとの結縁の証ですよ。」

七年に一度作り直すというそんな清らかな紐を、私に巻くというのはどうなのだろう。風情ある手枷に困惑して、とても歯を立てる気にもなれない。

「私は、虎ではありません」

惘然として言い返せば、男は笑った。なんだか腹がむかむかして、男の掌に預けていた左手を、払うように取り返してやる。私を拘束する五色の紐は、観音と繋がっているのだ。この男にではなく。

「逃げないでくださいね」

「無理です」

どうやって逃げろというのか。けれど男は逆の意味で受け取ったらしく、そっと眉をひそめた。

「此処に居てください」

強制はせずに懇願するのが、私には腹ただしい。

尋ねれば、男はなんでも応えてくれた。此処は本堂の地下、戒壇巡りの廻廊の一角だという。そう言われれば時折、風に乗って観光客の遠い声が聞こえてきたような気もする。戒壇巡りの終点、というか最奥の折り返し地点には木の扉があって、そこにも同じ五色の紐が結わえてあるのだそう。御本尊の手に繋がる紐に触れ、参拝者は結縁を感謝して現世に戻ってゆく。

「観音様の胎内に戻って、もう一度生まれ変わるといふ再生の儀礼なのです」

「...私は生まれ変わらないのですか」

尋ねれば、男は笑って応えた。

「今の貴女が良いですから」

白い衣

頬が熱い。

闇の中で抱き締めながらも、男は一度も、私を好いているだとか、愛しているだとか、いとおいしい等とは言わなかった。囁く声は甘く、低く、睡言のように私の身を溶かしてゆくが、ただ、行かないで下さいと繰り返すだけだ。

いっそ抱いてくれ、と思う。せめて口付けだけでも良い、私を欲していると言ってほしい。あの唇で触れて欲しい。

ほう、とおもわずこぼれた吐息が熱い。時折、確かにあのひとによぎる情欲を、満たすことならば出来るのに。あのひとの執着に、どうやって応えたらよいのか解らない。私はさほど賢くもないし、ひとの心に聡いほうでもない。私に出来ることなぞあまりないのだ。情けない。

飼い殺し、というよりも最早これは介護である。明かりを与えられず、見えぬ不自由さの中で戸惑ううちに、食事から排泄まで至極丁寧に世話されていた。恥らうような余裕もないまま、私はあわあわされるがままになっているだけだった。さすがに行水は出来ないが、頭の天辺から足の先まで、濡らした手拭いで綺麗に拭き清められてしまうので不快感はない。椿油で綺麗にくしけずられてしなやかに流れる私の髪を満足そうに撫でてから、男は櫛を置く。

「美しいですよ」

体中に触れられてしまったのに、そこに欲望は欠片もなかった。いたわるような優しさはまるで宝物を扱うようで、私はいっそ哀しくなる。私はにんげんの女なのに。

間近の、男の顔を見上げる。穏やかな微笑みは出会った時より変わらない。畜生、と思って俯く視界に、きちんと着物に包まれた男の胸板が広がる。香の匂いが染み付いた、僧侶の衣。力任せに、男の袷を引っ張った。私の力ではさほど乱すことも出来なくて、余計に悔しくなった。それでも、少しだけ現れた男の肌に、ぶつけるように唇を寄せる。男はそっと私の頭を撫でると、もう片方の手でぐいと袷をつかみ、大きくくつろげてくれた。嬉しくなって、男の胸に抱きつく。脇腹の固い筋肉を撫でながら腕を回し、真っ直ぐな背骨を少しでも近くに引き寄せる。触れる肌の、汗の匂いが嬉しくて頬を摺り寄せた。男の腕の力が強くなる。もっと、と男に縋る。身動きが出来ぬほどに抱きしめられて、苦しくなった。もっと強く抱いてと告げたかったが、口から出たのは苦しげな呻きだけであった。色気のないことだ、と我ながら思う。けれど声に出さぬ願いに応えるように、ぎりぎり男は私を締め付けた。このまま、と思う。このまま抱き潰して、と思いながら、私の意識は赤くぼやけていった。

あれ、と思ったときは水の中であつた。なんのことはない、足を踏み外したのだ。左手には白藤の枝を握り締めたまま、私は水に流されていた。

宿坊に飾る花を、と言いつけられて山に登った。薬草や茸の類いは解らぬが花ならばと、意気揚々登ったのは川沿いの小道。今を盛りと零れ落ちるような甘い香りに誘われて、真っ白い藤の枝に手を伸ばしたのだが...

「藤はなかなか脆いのだな」

思わず声に出せば、口に水が入って思わず飲み込んでしまう。甘く、清らかな水。そうだ、川に落ちたのだ。あまりに驚いて身動きもできなかつたのがかえって良かったのだろう、仰向けに浮かびつ沈みつ、そのまま流されている。山の清水は確かに冷たいが、肌にぶつかり弾けてゆくのが心地よかった。五月の日差しは既に暑く、水も柔らかい。弾けるあぶく越しに見える空が、青くて綺麗だ。触れたくなくて、腕を伸ばした。

途端、力任せに引っ張られる。驚いて開いた口に、また水が入った。今度は飲み込めずにむせてしまう。咳き込む苦しさに抗って身を振れば、さらに強く引っ張られた。水ではないかたい感触にぶつかり、そのまま首筋を捕らえられ、上を向かされる。苦しい。じやり、と足裏が川底の小石を蹴ったのが解った。ゴホゴホと咳き込むままに引き上げられ、のけぞった首筋をさらに強く捕まれた。吐き出した生ぬるい水が、口の端から零れていくのを乱暴にぬぐわれる。

「貴女というひとは」

触れられる手は熱い。水にぼやける目で見上げれば、私を救ったであろう男はひどく怒っていた。

「本当に、貴女というひとは」

男の震える唇に、水の雫がきらめいて綺麗だ。いつも穏やかに結ばれて、静かな言葉を紡ぐばかりの唇が、今は不安に震えている。私を失う不安に震えてくれる。

触れたくなくて腕を伸ばすと、力任せに抱きすくめられた。

失くした藤

ごめんなさい、と幾度謝っても、男の機嫌は良くならない。ざくざくと細い山道の先を進む背中が怒っている。途方にくれて俯けば、左手に握ったままの藤の花もすっかり打ち萎れてしまっていた。一層情けない気持ちになる。かといって、今更投げ捨てる訳にもいかず、濡れた枝を握りなおす。

「花をね、取ろうとしたんです」

眩くように言い訳すれば、引っ張られている右手が強く握られた。ちょっと痛いけど、応えるように握り返す。少しだけ、男の歩みがゆっくりになった。

「藤の花を、飾ろうと思って、それで」

嬉しくなって続ければ、じろりと振り向きざまに睨まれた。

「だからといって川に入る必要はないでしょう」

思わず下を向く。入りたくて入った訳ではないのだが、男が怒るのも当然なのだ。あの先は滝だから。

このまま流されてはいけないことは、私も知っていた。

「ごめんなさい」

流石に私も、滝から落ちれば怪我もするだろう。もしかしたら死んでしまうのかもしれない。先に行く後姿にもう一度謝りながら、濡れた着物のせいで浮かび上がる背の筋肉に、少しだけ気がそれる。男のひとなのだな、となんとなく思う。もうこれ以上声をかけるのが躊躇われて、男の背中に見惚れながら大人しく山を降りた。

寺に戻ったときには、藤の花は何処かに落としてしまっていた。空っぽの左手を見ながら、ううむと唸っていると、振り返った男が諦めたように息をついた。男の右手が伸び、私の左手を掴む。正面から両手を握られたかたちになって、戸惑った。

「貴女が無事で良かった」

ようやく微笑んでくれた男に、私はどうしようもない気持ちになった

もう、此処に来ることはないと思っていた。今日訪れたのは仕事の都合である。仕事ならば仕方なかろう、と後ろめたい気持ちを誤魔化して笑った。

黒っぽい艶やかな着物を着て、水仙を抱いて笑う。写真をぱしぱしと撮られ、他の娘さんたちと共にポーズを変えられ、またぱしぱしと撮られる。シャッターの音は心地よい。こうして花を抱いてぼんやり笑うだけでお金が貰えるというのは有難いことだなあとと思う。紹介してくれた人は、そういう見目に生んでくれた親に感謝しなさいよと笑っていた。父母よ有難う、と思う。

しばしの休憩となった。散策してきてても良いですよ、と言われて、娘さんたちから黄色い声上がる。小鳥のような声は微笑ましい。つられて私も、石畳の小道へ足を踏み出してしまった。いけない、いけないなあと思いつつも、道の傍らを流れるせせらぎの音に促されるように、馴れた道を進んでいた。細いせせらぎはやがて合流し、川となる。川を超えればもう其処は御山だ。橋の向こうに、参道は続いている。あのひとに。

橋の中ほどで、足が止まった。息が少し切れている。気づかぬうちに小走りになってしまったせいか、それとも逸る胸の鼓動のせいなのか。嗚呼、胸が痛い。けれどこれ以上は駄目だ、これ以上はいけない。欄干にもたれるように身を寄せれば、抱きしめたままであった花が、強く匂った。青臭いような、透き通るような匂いにくらくらして、御山から顔を背ける。橋の下を流れる清流は澄んで美しかった。そのまま、眼下の流れをただ見つめていると、少し気持ちも治まってくる。腕の中の水仙も下を向いて、黙って川をみつめていた。これ以上は駄目なのだ、この先へはいけない。解ってはいるが、悔しいような、腹ただしいような熱い塊が腹の中で蠢いている。だって、私をこんなふうにしたのはあの男なのに。こんな、おぼつかないものにしたのは、あのひとなのに。水面に浮かび上がる面影を消すように、目を閉じた。

どのくらいそうしていたのだろう。ふと、首の後ろが逆立った。ぴりぴりとした緊張が、細波のように肌を走る。自惚れかも知れぬが、私はあの気配に酷く敏感だ。目を開けているか閉じているかも解らぬ闇の中、あの気配だけを探して過ごした感覚を思い出して身震いする。ずっと、あの男の訪れだけを待っていた。闇の中近づいてくる、迷いのない足音。懐かしい香の匂い。怖くて目が開けられない。しかし恐ろしさと一緒に、震えるような喜びが喉にこみ上げる。あのひとだ、あのひとが来てしまう。もう私の左手に繋いだ五色の紐はない。もう私は自由なはずなのに、なのに、こんなにもあの男に繋がれている。強く閉じた瞼の裏が赤く染まった。

「気をつけて」

低く、放たれた声は優しくかった。耳をかすめた吐息は温もりも残さずに去ってゆく。がくがくと震えながら、ゆっくり目を開ける。涙で視界が滲んでいた。

見上げれば男は、はや橋の終わりにいた。山へと戻るその背中は懐かしく、けれど私の見慣れたものではない。衣の色が違う。きっと階位が上がったのだろう、立派に行くべき道を進んでいるのだ。私を拒んで。

男が振り返った。その右手に、しっかりと握られた水仙の花を見て、急に恥ずかしくなった。どうして、いつの間に、なぜ、言葉にならない感情に心乱される。

水仙を離さぬまま、僧はぐるりと反転し、参道を上がって行った。

独りでする食事は味気ない。美味しいものは好きだが、美味しいと笑い合えぬのならば食べても仕方ないような気がする。何もしない日々は腹も空かず、手近の茶店で甘味をつまむのが習いとなった。三日もすれば顔も覚えられる。愛想のよい主人にあれこれ訊かれるのに曖昧に答えるうち、仕事に疲れ恋を失った哀れな女という設定にされていた。三色団子を噛みながら、主人の話を訂正するのはなかなか難しかったのだ。新年度も始まって多忙なはずの四月、働き盛りの女がふらふらしているのは確かに訳アリに見えるのだろう。結婚だけが幸せじゃあないよ、などとよくわからない慰めに、桜餅を飲み込みながら頷いておく。鶯餅、蓬餅、田舎善哉に白玉餡蜜、茶蕎麦セットまで制覇した辺りで、主人は連日訪れる若い女の懐が心配になってきたらしい。ホテルなど高すぎる、それに夜独りで居るのは良くないからと言って、近くの寺の宿坊を薦められた。曖昧に頷きながら、みたらし団子を受け取る。さらに話を続けようとする主人の横に、折り良く僧が通りがかった。件の寺の僧らしい。主人は好都合とばかりに呼び止めて、私を紹介した。

僧は、精悍な顔つきをした若い男で、何処かの帰りなのか、見事な八重桜の枝を片手に抱えていた。主人に答え、此方を見下ろす視線は静かに澄んでいて、私は居心地が悪くなる。白い着物の上に重ねた若草色の衣を軽く払って、僧は私の隣に腰掛けた。ふわりと香の匂いがして、お坊さんだと改めて思う。主人は嬉しげに、僧にも茶を差し出してから行ってしまった。僧が黙って、静かに茶を啜る。どうしたものか困った。とりあえずみたらし団子を薦めてみたが、丁寧に断られた。それ以上薦める訳にもゆかず、とにかく食べてしまおうと、口を急いで動かしてみる。

「良い日和になりましたね」

ごくくんと団子を飲み込みながら、僧の言葉に頷く。

「花が綺麗です」

とりあえず相槌を打つてみると、隣で微笑んでくれたのが分かった。なんとなくホッとして、それからもっと何か話さなければと少し焦る。

「あの、早いですよね」

言ってしまうってから、ちょっと違った、と思う。

「ええと、萌黄の、御衣黄の」

これでは頭の悪い女みたいだ。恥ずかしくなって余計に混乱する。僧はそつと私の視線を追って傍らの桜の枝をみやると、頷いてくれた。

「そうです、早咲きの御衣黄桜です。よくご存知だ」

穏やかに、褒められるように応えられた。黄緑色の桜なんて一重の鬱金と八重の御衣黄くらいしかないもの、と思いながらも、優しい声音にちょっと嬉しくなる。

「綺麗な色です」

なんだか上手く僧の顔が見れなくて、その衣を見ながら呟く。綺麗な、清々しい萌黄色は、背筋の伸びた清らかな青年によく似合っていた。

「花は好きですか？」

「ええ」

即座に頷く。花は好きだ。美しくて儂い。

「ええ、とても。」

顔を上げると、初めて男と目が合った。綺麗な目。

僧はにこりと笑うと立ち上がり、私に桜の枝の包みを差し出した。思わず受け取ってしまう。

「え？」

僧は、店の主人に礼を述べて、すたすたと店の外へ歩き出した。

「あの、ええと」

慌てて立ち上がり追いかけるが、どうしたらいいのか分からない。まだ何も言っていないし、訊かれてもいない。それにこの桜は、どうしたらいいのか。

「よく似合いますよ」

振り返って、言われた。

「そのままいらっしゃい」

言い返せなくて曖昧に頷くと、僧はまたすたすたと道を歩き出した。寺に帰るのだろうか。私を連れて？

「あの」

腕の中の花は満開で、前に行く姿は颯爽として美しい。

何も言えぬまま、私は萌黄の衣に付いていった。

桜一枝

道すがら、完全に私はお供の荷物もちになっていた。僧は時折、顔見知りの人たちと爽やかな挨拶を交わしつつも足を止めず、私に声を掛ける間を与えなかった。私が気後れしていただけかもしれない。それに、抱えた桜の枝が思ったよりも嵩張って足元が見えず、歩き辛くて難儀した。男の歩幅に付いていくので精一杯だ。まだ歩き易かった石畳の道が終わると大きな橋を渡り、それから連なる苔むした石段を一生懸命上れば、そこは閑静な山の中であった。ざああ、と夕方の風が木々をざわめかせる。汗ばんだ肌が冷やされて心地よかった。

「着きましたよ」

僧は足を止め、此方を振り返っていた。花を返して、漸く肩の力が抜ける。重くはなかったけれど、預かりものを運ぶのはやはり緊張した。

「あれが宿坊です。寺のお手伝いをして頂けるなら、宿泊費用は要りませんよ。ホテルに電話をして、荷物を取りにいったらいい。」

建物のひとつを差した僧の指先をぼんやり見つめていると、骨ばった指はゆるく動いて、抱えた花の枝をぼきりと手折った。そのまま差し出される、桜の一枝。

「貴女の部屋に飾るといい」

受け取れば、その手はそのまま上に上がって、私の頭にぼんと置かれた。

「御褒美です」

なんてことするの、と思ったが、顔を上げたときには既に後姿は遠くなっていた。

なんというかたぶん褒めるのが上手なひとなのだ。恥ずかしくない、だから恥ずかしくなんか無い、と自分に言い聞かせる。

間もなく日が暮れる。ともかくも、今夜の宿は此処になりそうだ。

香りよきもの

私を連れてきたのはあの萌黄色の若い僧だったが、私の滞在を許可したのは柔和な顔つきの年配の僧侶だった。住職というのか、ともかくも偉いひとなのだと思う。甘味屋のご主人と懇意らしく、私の話を聞いていたようだった。広くはない町だ、ホテルの方とも当然のように知人らしい。話はトントンと進み、狭いシングル部屋に残してきた私の荷物は、ついでだとか言われてあっさり届けられた。ホテルのマイクロバスは軽やかに山道を下ってゆく。なんというか、反論の余地もなかった。これでいいのだろうか。

それから、作務衣姿のちょっと目つきの怖い厳しい顔をした僧に、境内を簡単に案内された。冷たい廊下を進む途中、聞きたいことがあると振り向かれる。来たかと思って居住まいを正せば、嫌いなものはないかと問われた。何の禅問答かと思えば、彼は厨の担当だという。重ねて、好きなものはあるかと訊かれる。

「ええと、香りの強いものは、好きです」

うむ、と男が作務衣姿の腕を組む。続きを促すような視線に、そうか分かりづらかったかと、慌てて具体例を探して言い募る。

「ふきのとうとか、独活とか、生姜とか、ええと金平糖とか」

「はは、此処にやア金平糖はないな」

甘いもんが好きなら下の甘味屋に行くといい、と言って男は笑う。まさか其処から来ましたとも言えず、私も曖昧に笑っておいた。

夜のお勤めの後、部屋に来るように呼ばれた。この寺にお世話になってはや五日、これが初めてだ。もしやそろそろ追い出されるのだろうか少し不安になる。いやでもそれなら住職からお声がかかるはずだ、行き掛かり上私の保護者扱いとはいえ一修行僧の自室で話される道理はない。そうだ、自室なのだと思うと妙に緊張する。どうしよう。何かお小言だとか。粗相はしていないつもりだけでも、でも。

もう襖の前まで来てしまった。小さく声を掛ければ、すぐに応えがあった。

「失礼いたします」

おそるおそる襖に手をかける。そっと開ければ、並べられた本に目が行った。沢山の仏教書。男は着物姿できちんと正座をして、此方を見ていた。促されて、恐縮しながらも大人しく正面に座る。我ながら少々挙動不審かもしれない。どきどきする。

「此れを貴女に」

小さな包みを差し出された。首を傾げれば、開けてごらんと言われる。怖いお話ではなかったことにホッとしながら、そっと包みを開ける。

「ま」

真白い和紙の包みの中は、金平糖であった。色とりどりの、とげとげした小さな星たち。慌てて男の顔を見上げる。

「好きだと言っていたでしょう」

「ええ、あの、とても」

こくこく頷けば、食べてごらんと微笑まれた。空気が動き、ほわりと甘い匂いが広がる。書物の匂いと、香の匂いが混ざる彼の部屋。そこに、甘い金平糖の匂いが重なったことが、凄く嬉しい。

「嬉しいです」

「そうですか」

「嬉しいです、とても」

「そうですか」

甘いお菓子など、似合わないひとの部屋。清廉な男に、甘ったるい匂いが絡みついていくのは、ぞくぞくするような幻想だった。

橘の味

お供の荷物もちで、僧の後ろを歩いてゆく。綺麗に包まれた風呂敷包みの中身が何かは知らないが、大して重くはない。穏やかなお天気、外を歩くには気持ちが良いので、大人しく後を付いていった。檀家さんのおうちでも、僧の斜め後ろに大人しく正座して、煎茶と和三盆を頂く。それではと促されて抱えていた風呂敷を解けば、ノートパソコンが現れて驚いた。我が先導の僧は馴れた手つきでパワーポイントを立ち上げ、何やら打ち合わせを始められた。OSが新しいやつだなあといいながら横でぼうっと見つめていると、サクサクと話は終わり、また来週といわれ立ち上がった。パソコンは置いていくらしい。という訳で帰りの私は手ぶらだ。役立たずめ、と他人事のようにいいながら俯いて歩いた。

「貴女は何も訊かないのですね」

前を歩く僧が言った。

「こちらこそです」

驚いて、妙なことを口走ってしまう。

「いえあの、私のことを何もお訊ねになりませんし、その、理由とか色々」

言葉がうまく出てこなくて、ちょっと恥ずかしくなる。以前は、言の葉はこの胸に溢れ、喉から簡単に滑り落ちたが、今は違う。私の中は空っぽで、ただしい言葉を引き上げるのに四苦八苦だ。空っぽの胸に押し当てていた手を下ろすと、何も持たぬ両の手に心許ない気持ちになった。

「語らずとも、解ることは沢山あります。貴女の手は、綺麗だ。」

私の、空っぽの手を見下ろし、僧が言う。

「何か持ちますか」

静かに尋ねられる。でも、もう何を持ってばよいのか解らない。

すると僧はおもむろに、傍らに自生する柑橘の樹に近づき、そのたわわに実った果実をひとつもぎとった。

「どうぞ」

ぎよっとする。ぎよっとしたまま差し出された果実を受け取る、受け取ってしまった。青い、すっとした柑橘の香りが、魔法のように私に降りかかる。喉のつかえが、清々しい香りに砕けてゆくような心地がした。

「...昔の袖の香がします。」

滑らかに自分の口から零れた低い呟きに、過去が戻ってくる。ことばが、気持ちが溢れ返る。怒りや喜びや、憧れや、私を苦しめていた何もかもが。鮮やかな果物の表皮に、ぎり、と爪を立てれば、包む香りが強くなった。唇が、歪むのを止められない。

私がこの手に掴んでいたもの、掴もうとしていたもの。繋いでいたものの重さを思い出す。厭だ、厭だ、もう厭だと思った全て。

「放しますか」

涼やか瞳に正面から見つめられ、私の怒りは煽られる。清らかな聖よ、お前にいったい何がわかるというの。

「いいえ、私は過去を望みません。私は自分で自分の手を放しました。ようやく得たこの空虚にこそ何か私の求める答があるはずです。答えなぞなくとも、私がこれを求めたという事実が変わりは御座いません。御坊さま、あなたの清らかな御手は私には必要ない。花橘なぞ糞くらえです、むしろこれは非時香菓（ときじくのかぐのこのみ）、不老不死の妙薬にいつそ羽化登仙の心地がします。虚ろなこの身はさぞ軽やかに、補陀落浄土までも飛んでゆきましょうや。嗚呼、可笑しい。」

煙に巻くような言葉の羅列は私の常套手段であったのに、僧は静かに瞬きしただけであった。

畜生。頭のおかしな女とでも思えばいい。

僧の温かい手が、私の指に触れた。びくりと身体が震える。僧の指は優しく私を解き、爪を立てていた黄金の木の実を取り上げた。

「預かりましょう。」

私の目が剣呑になる。

「与えておいて取り上げるのですか。」

「貴女はまだ、現世のほうがお似合いですよ」

さらりと返されて、余計に目が吊り上った。

「まああ、世俗をお捨てになった身で、よくおっしゃる。聖の身のその口で、私は救えませんよ。返して頂戴、その薬を。」

どうしても山吹色の果実を取り返そうと、詰め寄った。橘は常緑の樹、その果実は代々絶えることない。丸い月のようなその果実は、いつかの天皇が命じて常世の国へ取りに行かせた、不老不死の霊薬なのだ。

「引導を渡してくださるならともかく、過去を見つめろと説教した拳句に俗世の泥に帰すおつもりですか。自分だけ清らかな世界にいて、私は」

「ではなぜ付いてきたのです、私に」

くしゃり、と何ともいえない音を立てて、男の手の中で果実が潰れた。柑橘の強い匂いが、私たちを包む。

「なぜ付いてきた」

「花をくれたでしょう！」

泣くように叫んでいた。

「あなたが、花を、くれたんでしょう」

僧の濡れた手が、私の顎を捉える。この手に、潰されてしまった私の月。もう天へ昇れないじゃないの、どうしてくれるの。果汁で濡れた指が唇にあたる。酸っぱくて、苦くて、ぴりぴりする。僧は静かに怒りながら、そのまま私の口に指を押し込んだ。

「う、ぐ」

「苦いですか、不老不死の妙薬は」

強い酸味と苦味で舌が痛い。口の中いっぱい男の指が入り込んで、唾液が溢れ、柑橘の匂いにむせそうになった。目の前の衣をわしづかんで、叩いて苦しさを訴える。

長い指が舌に絡み、歯をなぞり、上顎を撫でられ、息が苦しい。気づけば口中の苦味は消え、濃

厚な愛撫のような指の動きから与えられる甘さに目を閉じていた。柑橘の匂いは、頬に触れる衣から漂う香の匂いに変わっている。私を包む、男の体温が心地よい。

「苦いですか」

低い囁きに我に返った。慌てて顔を背ければ、男の指は素直に口の中から出て行ってくれた。急いで唇と顎を拭う。私はいま何をしていた？ 顔が熱くて、恥ずかしさに涙が出そうだ。

僧は静かに後ろを向いた。

「帰りますよ」

清廉な背中。先ほどまで口の中を蹂躪されていた女の恥ずかしさなど、この背中では気にも留めない。この男がまだ聖でなかったならば、と思う。そうしたら、あのまま深く口付けて、溶けたこの身を抱いてくれたのかも知れぬのに。

悔しくて、悔しくて。この借りはかえしてやる、と小さく握りこぶしを作った。

借りを返せる時は、意外にすぐにやってきた。夜のお勤めの後、厨房でお茶の片づけをしているところで、僧に鉢合わせした。手に、小さな入れ物を持っている。緑色の釉薬が美しい小さな壺の中身は、蜂蜜であった。檀家さんからの頂き物らしい、栗の花の蜂蜜だという。思わず目が輝く。甘いものは大好きだ！

食べてみますか、と笑いかけられて大きく頷きかけ、そしてちらりと僧の顔を見た。僧は穏やかに微笑んでいる。誰もいない厨房、時は夜、二人きり、条件は完璧だ。ニヤリ、と口が歪むのを押さえて、僧に近づく。壺をもつ手に意味ありげに触れながら、上目遣いでねだってやる。声は甘く甘く、誘うように。

「食べさせてください、な？」

固まるかと思いきや、僧は爽やかに破顔した。

やはり私の色香では、聖をたぶらかすことなぞ出来ないようだ。気づけば逆に翻弄されている。掬った蜂蜜を差し出されては、大人しく口を開けて受け入れていた。身体が熱い。香ばしい栗の味がする濃厚な甘さを味わいながら、骨ばって長い指を丹念に舐める。優しく口腔を撫で上げてから、指はそっと焦らすように引き抜かれ、また蜂蜜を掬って差しだされた。恥ずかしいし悔しいが、相手が平然としているので今更止められない。親鳥に餌付けをされているようだ、と思いつつも、指の感触にだんだん頭がぼうっとしてくる。うっすら涙で曇る視界に、僧の微笑が映る。なんでそんなに嬉しそうなのだ。

「栗の花はね」

熱い声が耳元で囁く。思わず目を閉じると、低い甘い声と一緒に、喉深く指を突き入れられた。

「男の精の臭いがすると言いますよ」

身体が震える。もっと飲み込みたくて自然に口が開く。口の端から零れた唾液を、そっと拭われた。駄目だもう絶対に気づかれている、と思う。私はこの男に欲情している。しかも一方的に。口付けもしてもらえないというのに、だ。

コトりと壺の蓋が閉められる音がして、それから戸棚を開閉する音がした。流れる水の音、それから冷たいものが頬に当てられる。

「すみません、冷たいですね」

濡らした手拭で、そっと口元と喉を清められた。

目元も拭われて、ゆっくり目を開ければ、僧は思った以上に近くで笑っていた。その澄んだ目を覗き込んでしまい、どぎまぎする。

「さ、送りませんから、貴女の部屋に帰りなさい。」

優しく私を立たせる腕は熱い。頬を撫でる掌も、脛にかかる吐息も、こんなに熱いのに。

「誰にも見つからないように。誰にも顔を見せてはいけませんよ」

大人しく、頷いた。

不貞腐れた子供のような顔をしているのが、自分でも解っていた。

宿坊には様々なひとが訪れた。皆、何のために此処を訪れたのかちゃんとわかっている、休息やら静寂やら観光やら、それぞれの目的を果たしては帰っていった。やってきては去ってゆく人々をぼんやり見つめる。その中にはわたしと同じくらいの年の女性も多かったが、皆一様にどこか飢えたような顔をしていた。自分を見つめ直すだとかスピリチュアルだとかいう言葉で装いながら、己を生きようとする女たちは強かで美しい。足りない、と声なく叫んでいるようなその顔は、わたしとはまるで違う生き物のように思えた。

女たちは皆、長いこと御本尊に頭を下げて何事か祈っていった。唇が祈りの言葉に動いていることもある。その傾いた首筋に落ちる髪が美しく、わたしはつい手を動かすのを止めて見とれてしまう。やがて長い祈りから頭を上げると、女たちは振り向いてわたしに気づき、ほんの少し眉を上げるのだった。それが、ぼんやり覚束無いわたしへの侮蔑であるのだと知ったのは最近だ。

「こっちは真剣なんです」

綺麗な、しかし尖った声を投げつけられた。

「本当に真剣に、神様に祈ってるんだから」

神様じゃなくて仏様なんじゃないかと思ったが、言い返す気力はなかった。

何も言わないわたしをねめつけて、女たちはすらりと伸びた背筋で明るいほうへ去って行った。

祈る声が、煩わしい。毎朝の読経すら耳に付き、今日のわたしはなにやら臍腑が落ち着かない。月が丸いせいかもしれない。疑問を腹に抱えていられないような気持がして、ふいに祈る女に話しかけてしまった。

「叶うのですか」

え、と振り向いた女の顔は酷く幼くみえる。

「願いごとは叶うのですか」

女はそっと瞬きして、わたしを見分するようにつめた。

彼女たちは真剣だ。こんなに必死に祈っている。忙しい毎日から有給をもぎ取るようにして此処に来る。長い時間をかけて御本尊に祈りを捧げる。それが、本当に意味あることなのかわたしには解らない。

「貴女の願いを叶えられるのは貴女だけなのに」

「かみさまに貴女の祈りが聞こえるか分からないのに」

ほろほろと呟くわたしに、彼女は呆れたように笑った。

「バカね、これは決意表明よ」

キラリと真珠のような歯がこぼれた笑顔は鮮やかだ。

「私が願うことを、私がこれから実現して見せることを宣言してるだけよ」

言いながら、馴れた手つきでバッグから財布を取り出し、小銭を数え始める。鈍く光る十円玉を四枚と、妙にキラキラした金色の五円玉を一枚確かめて、節分の豆撒きのように威勢よく放り投げた。チャリン、カリン、と木製の賽銭箱に音が響く。

「アナタもお願いなんかしちゃ駄目よ、言い切らないと」

順序が違うように思ったが、彼女は満足げな表情で私を振り返った。

「言わなきゃ、伝わらないんだから」